

「楽習と参画のまち佐野」の実現を目指して

2022年11月28日 佐野市生涯学習に関する職員研修
若者文化研究所 西村美東士

1 「楽習と参画のまち佐野」

西村美東士「佐野市の市民参画による生涯学習推進」
[生涯学習研究 e 辞典](#)（日本生涯教育学会）

「楽習と参画のまち佐野」都市宣言

私たち佐野市民は、ひとりひとりが楽習をとおして個人として深まり、その個性を生かし、協働して佐野のまちづくりに参画します。たがいに自分らしさを認めあい、支えあい、はぐくみあう仲間をつくります。まちづくりへの参画のなかで、自分らしさを佐野のまちに咲かせます。

私たちはふるさとを守り、はぐくみます。家庭、地域、学校、職場のなかで、世代や価値観の違いを超えた心の交流を広め、安全で安心なまちをつくります。子育てのなかで親が育ち、こどもが愛されて育つまちをつくります。

私たちは佐野のもつすばらしい自然と文化を学びます。ふるさとの自然を守り、ふるさとから文化を発信します。

ここに佐野市を「生涯学習都市」とすることを宣言します。

平成 19 年 12 月 25 日

佐 野 市

2 高齢化の中の生涯学習

生涯学習の理念として、教育基本法第3条に「あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない」と規定されているそうですが、実際のところどこまで実現可能なのでしょうか。佐野市のような高齢化が進む自治体においては、どのようにその機会や場所を確保すればよいのでしょうか。（介護保険課）

回答：高齢者にとって、ひとりぼっちではなく、人との接触があることは、とても大切だと思います。その相手はヘルパーさんでもいい。「支え合って生きる」ということを大切にしたい。

山田リズム体操クラブ代表 山田喜美江さん

[下野新聞 HP](#)

近所の人を外に「連れ出す」という効果 学び合い支え合い

3 生涯学習の範囲と「見える化」の必要

社会教育や大人になってからの学び直し（リカレント教育）だけでなく、地域のお祭りやイベントに一般来場者として参加することも生涯学習に含まれています。何が学びかは本人の感覚によるものですが、「生涯学習」の範囲が無限に広がり、かえって捉えにくいものに感じます。（議事課）

生涯学習の対象となる学びの種類は幅広く、人によって捉え方も違うため、どこまでを生涯学習と考えるのか判断に悩むことがあります。西村先生の考える生涯学習の範囲をお教えいただきたいです。（生涯学習課）

回答：生涯学習の範囲は漠として広い。しかし、われわれが「見える化」と、実施の責任をもつのは、もっと限定的な範囲です。

われわれは、「生きること」とは「学ぶこと」だと考えています。そして人が育つには方法があります。これを見える化するため、『学びの見える化の理論と実際』（勁草書房、共著、2023年3月発行予定）という本をまとめています。ただし、本書『学びの見える化方法論』では、①学校教育などのフォーマルな教育及び②社会教育などのノンフォーマルな教育を中心に据え、③家庭教育などのインフォーマル教育は扱わないこととしました。なぜなら、①、②の学びには学習目標（教育目標）があり、その過程と到達度を見える化して計画化することにより、責任をもった教育や効果的な学習がこれまで以上に期待できると考えたからです。

私がまとめた、本書の概要を、下に記しておきます。

『学びの見える化方法論』概要

<理論編>

第1章 なぜ、「学び見える化」するのか

われわれは、「生きること」とは「学ぶこと」であるととらえている。個人的にも、社

会的にも、充実した人生を送るために、人は多くのことを学んでいく。この学びの中で、社会の側が意図的に学びを促す「教育」が、プロセス等が見えないまま進められていくことについて問題を感じている。現場では、最終結果に対する責任を持つことが求められており、成果保証もしながら実践しなければならない。「教育が学習者の主体性を育てる」ためには、見える化が大きな貢献をなすと考えたい。

第2章 「学びの見える化」モデルの方法論

わが国の教育政策においては、「確かな学力」という概念のもとに、各教科の学習指導要領が演繹的、体系的に組み立てられていく。その上位概念に位置づけられた例えば「生きる力」などの「新しい学力観」が忽然と登場する。現場からの目線としての帰納的思考は、反映できずじまいとなる。われわれの提起する「学びの見える化」モデルは、現場から帰納的に積み上げ、この世に二つとないリアリティを実現する。その典型として必要能力を構造化するクドバスがあり、学びの「全工程」を見える化するプラットフォームがある。

<実践編>

第3章 「学びの見える化」の実践:企業での試み

現場力向上システムは、人間とシステムの共同作業を必要としており、いわゆる工学的な技術システムとは性質を異にしている。本章では、このような教育の本質を踏まえた人材育成の最前線の取り組みが報告されている。ほとんどの社員は、願わくば「役に立つ存在」でありたいと考えているが、仕事で役に立つ必要能力と効果的な習得方法は「見える化」されていない。「見えない」がゆえに、「私は向いていない」などという「全否定」の極論に走ってしまうのだろう。

第4章 「学びの見える化」の実践:行政・非営利組織での試み

現在、自由で主体的な学びが、まちづくりへの参画や国際貢献などの活動のなかで、活発に行われている。そして、多くは、組織的、計画的な意図的支援によって支えられている。そのとき、個人の思いやニーズを潜在的なものも含めて把握した上で、社会への参画や貢献につなぐ見通しと方法を「見える化」して示すことが求められる。仲間とともに参画する活動であるとしても、教育の本質を踏まえて、個人に適した支援をする必要がある。本章では、このような実践を取り上げ、その成果を検証したい。

第5章 「学びの見える化」の実践:学校での試み

本章では初めに、文部科学省がどのように高等教育の学びの見える化と質の保証を進めようとしているか、その政策を追う。その政策に関して危機感を感じても、「やりがい」を感じる教員はあまり多くないようだ。本書では、学生も教員も本気になれる「見える化」を追求している。また、中等教育までの教員は、学習指導要領や、これを重視する行政、保護者、世論に囲まれて、「やりがい」を求めて工夫したくても、そのゆとりがなくなっている。そのため、生徒にとっては、学ぶ内容の価値や面白さ、わくわく感、新しい価値などが見えないまま、受験のための「学び」に沈んでしまいがちとなる。学校教育は、社会に向けた自己の「有用感」を明るく育てていくことが大切と考えたい。

第6章 学びの見える化方法論の課題と展望

現在、コンピテンシー論や非認知能力論などの「新しい能力論」の台頭がある。これは、本書がめざす「学びの見える化」の観点からは、停滞の状態にあると見受けられる。本章では、「新しい能力」についても、できる限りその「見える化」を進めるための方法を探る。さらに、教育目標に沿った計画化や到達度の評価が避けられがちなワークショップや居場所論でも、これらの「見える化」が必要であり、可能でもあることを主張したい。その上で、クドバスを超える可視化の新しい手法の開発、見える化の質的向上、評価

方法論の課題、学問および体系化に関する課題とその展望を論じている。

詳しくは本書を見ていただきたいが、重要なことは、目標追求活動としての「教育」においては、目的、目標、方法、評価基準を明らかにして計画化し（P D C A）、学習者が主体的に取り組めるよう「見える化」することです。学びは人が生きることそのものにつながっており、偶発的学習まで含めて広大な範囲をもっていますが、われわれが追求すべきは、広範な学びの支援とともに、意図的な教育活動の目的から評価までを見える化することだと考えます。

皆さんに知ってほしい見える化の方法として、ここでは「必要能力の構造化」と「暗黙知の言語化」を紹介します。

4 必要能力の構造化

必要能力の構造化の方法として、CUDBAS (A Method of Curriculum Development Based on Vocational Ability Structured : 職業能力の構造に基づくカリキュラム開発手法) を紹介します ([職業教育開発協会 HP](#))。

下図に示した CUDBAS チャートは、大学生 4 人の授業で、親として獲得すべき多様な能力を構造化したものです。これに基づいて学習内容を編成しました (西村美東士 [「クドバスを活用した子育て学習の内容編成－高校生の子をもつ親のために」](#) 聖徳大学生涯学習研究所紀要『生涯学習研究』3 号、pp.41-54、2005 年 3 月)。

CUDBAS では、1 人でおおよそ 20~30 枚もの「能力カード」を書かなければなりません。そのカード書きの時間は、メンバーに対して「自己内対話」を促す効果があると考えられます。課題解決のための研究は、對他者体験だけでは進めることができません。ときには孤独な自己内対話が必要になります。その結果がカードに「見える化」され、メンバーに共有されます。その後、他者との対話のなかで、能力カードのグルーピング、左列の仕事カードの書き込み、行列の重要順の並び替えが行われ、CUDBAS チャートが完成します。ここですべての能力カード (=教育目標) をもとに科目構成をすれば、構造的な学習プログラムができあがります。CUDBAS チャートだけで言えば、2 時間程度という驚くべきスピードでできあがることも、特筆すべき特徴です。

CUDBAS チャート「高校生の子をもつ親」（列・行ともに重要度順）

仕事	能力-1	能力-2	能力-3	能力-4	能力-5
1 前向きな態度を示す	1-1 A 人生に対して前向きな態度がとれる	1-2 A 人権を尊重する態度がとれる	1-3 A 自分が間違っていたら子に謝ることができる (BBS)	1-4 B 親自身がうまくいかないとき、ヒステリックでない態度がとれる	1-5 B 家族旅行をしたとき楽しい態度がとれる
2 子の変化を待つ	2-1 A ほっとしておくことができる	2-2 A 子のプライバシーを尊重する態度がとれる	2-3 A 知っていても知らない態度がとれる	2-4 A 子を信頼することができる	2-5 B 子にとっては家がわずらわしいことを知っている
3 子の実態を理解する	3-1 A 子の今の精神状態を知っている	3-2 A 青年期は不安定な気持ちでいることを知っている	3-3 A 青年期の心理的特徴を知っている	3-4 B すぐに反抗してくることを知っている	3-5 B 子の生活態度を知っている
	3-6 B 親にうそをつくことを知っている	3-7 B 子の友人関係を知っている	3-8 B 彼（彼女）がいるのを知っている	3-9 B 望ましい勉強方法を知っている	
4 子と意識的に関わる	4-1 A 子からの相談や話し合いに応ずることができる	4-2 A 何に関心があるかを知っている	4-3 A じっくり話を聞くことができる	4-4 A わが子に注意ができる	4-5 A 子が悪いことをしたときき然とした態度がとれる
	4-6 B 子がパニックにおちいっているとき冷静な態度がとれる	4-7 B 子が落ち込んでいるとき上手に励ますことができる	4-8 B 家では食事を一緒にするよう誘うことができる	4-9 B わが子にあいさつができる	4-10 B 高校生に適した性教育ができる
	4-11 B 子からの進路相談に応じることができる	4-12 B 現代社会の就職状況や仕事の内容について知っている	4-13 B 部活のおっかけができる		
5 他の関係者と連携する	5-1 A 学校の様子を知っている	5-2 B 同じ高校生の子を持つ親と情報交換や相談をすることができる	5-3 B 学校側と緊密かつ自立的な連携ができる		
6 家庭を安らぎの場にする	6-1 A 家族との会話がでる	6-2 B 他愛ないおしゃべりができる	6-3 B 励ます時、子が何を食べたいかを知っている		
7 子と相互に生活を支え合う	7-1 A お願いの態度がとれる	7-2 A そうじ、片づけを子にさせることができる	7-3 A 食事の仕度、洗たく、そうじができる	7-4 B 高校生に必要な栄養素について知っている	7-5 B 子にとっての必需品を買うことができる (買い物)
注1 能力の種別は右のとおりである 注2 能力の重要度は右のとおりである		知識	技能・態度		
		A: 非常に重要で、詳細に知っているか、よくできる必要がある B: 普通であって、一般的に知っているか、普通にできればよい C: あまり重要でなく、概略を知っているか、体験していればよい			

5 暗黙知の言語化

暗黙知の裾野も広い。しかし、「見える化」できるものまで「見える化」せずに、「見て盗め」というのではあまりにも人材育成の効率が悪い。無力感にさいなまれる人も出てくるでしょう。

大学においても、これまでは、自己と職業とのマッチングを考えさせることなどはやってきました。しかし、実際の仕事の仕方を教えるのは、就職先も多様であることから、ほとんど不可能と思われてきたようです。そして、学生は「学校という群れから離れて社会に一匹で飛び出した」とき、仕事の手順だけ教わり、あとの多くは「カン・コツは見て盗め」と言って突き放されるという実態があります。

われわれは、平成 26 年度から放送大学教育振興会助成研究「キャリア教育のための暗黙知教材の開発」を進めてきました。そこでは、ICT システムを活用して、下図のようにベテランの「カン・コツ」を考えさせます。このことによって、今日の個人化する若者たちも、ベテランの活動を共感的、臨床的にとらえ、「なぜ、どのように、どんな基準で」と問いを発して、帰納的に特殊解を見出すことができるようになります。形式知の一般解からの演繹的な学修だけでは、職業へのこのような主体的な構えを身につけさせるのは難しいと考えます。車検の満了日を見ることは手順書には書かれていても、お客様に関する推察力という豊かな経験値は、図 3 に示したような動画による技能分析表によらないと理解できないからです（西村美東士「暗黙知の見える化研究へのお誘い」、聖徳大学生涯学習研究所『聖徳大学生涯学習研究所だより』2 号、2016 年 6 月）。

（外車セールス教材については、西村美東士 [「外車販売のポイント」](#)）

暗黙知の構造

われわれの研究では、暗黙知の構造を図1のような氷山モデルでとらえている(本図は若者の社会化支援者の例である)。最後まで言語化、形式知化できない深層の暗黙知は興味深いところである。だが、子育て者、若者、職業人等の幸福追求の一環としての学びの要求に応えるためには、問題解決のための科学的なアプローチによって、第3層までの形式知化を進めることが、研究者としての急務であると考えている。ただし、第4層といえども、心身の体験学習によって能力達成はできる可能性はあり、教育実践としては追求が期待されるところである。そのような開発的实践との往復活動により、暗黙知研究は進展するものと思われる。

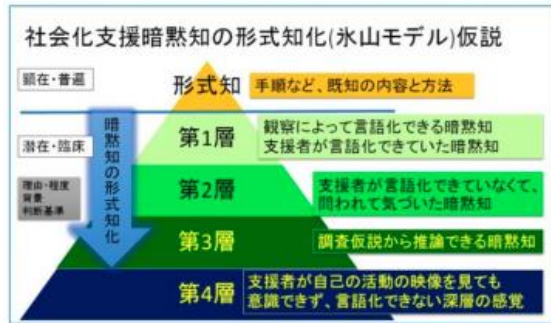


図1 社会化支援暗黙知の形式知化(氷山モデル)仮説

子育て暗黙知の可視化

2005年度文部科学省選定聖徳大学社会連携研究推進事業「連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究」では、技術・技能教育研究所長森和夫氏の指導を得て、図2のような教材を作成した。

図2 暗黙知教材「子育て支援のポイント」より

子どもの「やんちゃな活動」の動画を見せ、「あなたならどうする」と考えさせたあとに、ベテランの保育士がそれをどう理解し、どう対応したかを示す。このような学び方は、親だけでなく、保育を専門に学ぶ学生のための実習前教育などにも効果的だと考える。

セールス等の暗黙知の可視化

これまでの大学は、自己と職業とのマッチングを考えさせることなどはやってきた。だが、実際の仕事の仕方を教えるのは、就職先も多様であることから、ほとんど不可能と思われてきたようだ。そして、学生は「学校という群れから離れて社会に一匹で飛び出した」とき、仕事の手順だけ教わり、あとの多くは「カン・コツは見て盗め」と言って突き放される。

われわれは、2014年度から放送大学教育振興会助成研究「キャリア教育のための暗黙知教材の開発」を進めてきた。そこでは、ICTシステムを活用して、下図のようにベテランの「カン・コツ」を考えさせる。このことによって、今日の個人化する若者たちも、ベテランの活動を共感的、臨床的にとらえ、「なぜ、どのように、どんな基準で」と問いを発して、帰納的に特殊解を見出すことができるようになる。形式知の一般解からの演繹的な学習だけでは、職業へのこのような主体的な構えを身につけさせるのは難しいだろう。車検の満了日を見ることは手順書には書かれていても、お客様に関する推察力という豊かな経験値は、図3に示したような動画による技能分析表によらないと理解できないのである。

図3 暗黙知教材「外車販売のポイント」より

このほか、今年度からは、科研費研究「個人化する若者に対する社会化支援における暗黙知の解明」を始めた。ときの政策のブレの陰で埋もれていく若者支援のベテランたちの「カンとコツ」の蓄積を、広く関係者の財産にしていきたい。

研究者だけでなく、子育て者、支援者、企業、学生などの幅広い協力を得て、ベテラン人材の発見、職業人像や課題の整理、必要能力の構造化、動画収録、暗黙知インタビュー、技能分析表の作成と教材化、実践による検証の面でコラボを進めていきたい。

6 QOL (人生の質) への関心

- ①生涯学習に関して→いまの自分には縁遠いと感じている。
それは生涯学習が、退職後の時間が空いている人向けの制度だと思っている(思わされている?) ためかもしれない。
- ②疑問→他人と関わりを持つことが億劫だと考えている人に対し、どのような生涯学習を押し進めるか? (国体推進課)

時間や生活に比較的に余裕のある方でないと参加しようと思えず、対象者が狭い。(文化推進課)

回答：自分のQOLに関心のない人はいないでしょう。もし、その関心が、あきらめや生活苦などによって潜在しているなら、生涯学習の魅力的な世界を伝えることによって、顕在化させることを考えたいですね。それは、憲法の「幸福追求権」の実質化につながるのではないのでしょうか。

参照：[現代QOL学会](#)

7 若者への理解 個人化/社会化への対応

昨今の若者や働き世代は、生涯学習を含め、ストレス発散など自身の時間を大切にしているように感じる。特に子育て世代は、以前は子育てに時間をとられ、自身の楽しみなど後回し（する暇がない）にしていたように感じられる。（広報ブランド推進課）

回答：「自分の時間を大切にしたい」という個人化傾向が強まっているのは確かかと思います。同時に人々とのつながりも求める傾向が見受けられます。個人化/社会化の一体的理解によって、タイプに応じた対応が求められると考えます。

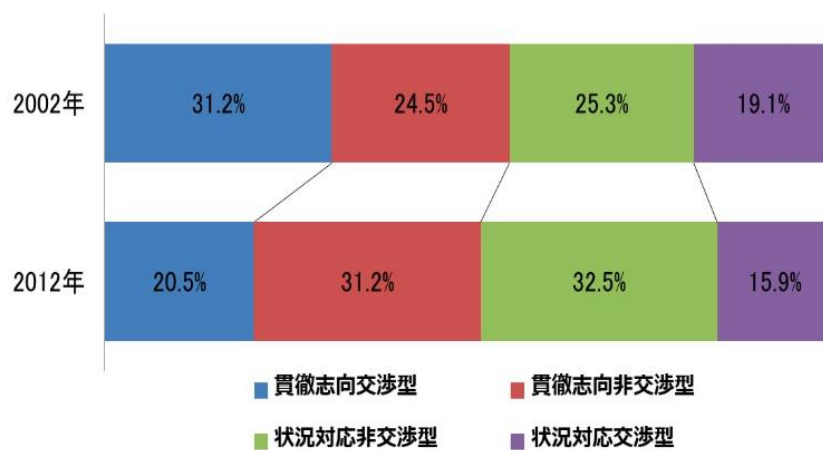


図 若者の個人化/社会化の変化

出典：西村美東士「[この20年に若者の意識、生活、考え方はどう変化したか—個人化に対応する青年団体育成の方法を考える](#)」、全日本社会教育連合会企画・日本青年館『社会教育』69巻2号、pp.26-33、2014年2月。

ここでは、下図のような個人化と社会化に関する一体的理解が必要になります（西村美東士「[個人化の進展に対応した新しい社会形成者の育成—キャリア](#)

教育及び青年教育研究の視点から」、『日本生涯教育学会年報』33号、pp.145-154、2012年11月)。

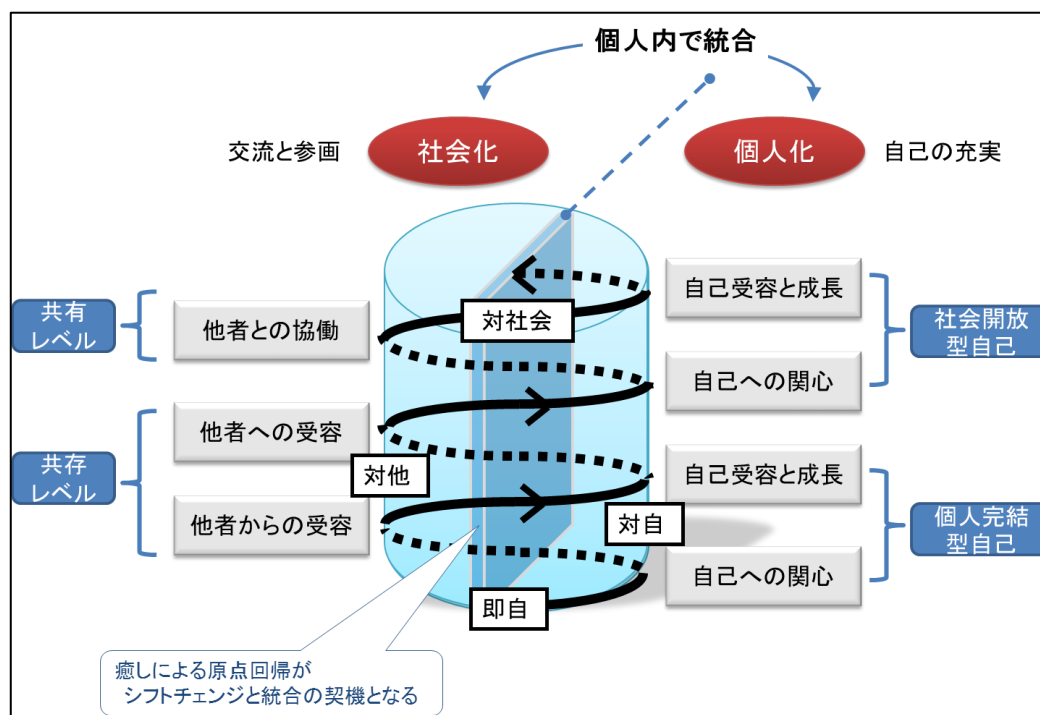


図 個人化と社会化のスパイラル

ここで「即自」とは、自分自身で感じたまま対処する状態です。個人は、ここから出発し、「対自」において、自分自身を見つめて、問題をどう解決するかを考えるようになり、やがて、「対他」において、他者との関わりを考えるようになり、対社会に発展します。そのことが、社会における自己の適正な位置づけにつながり、社会形成者として必要な能力を獲得することになります。

このスパイラル自体は連続的なプロセスですが、本図を右の個人化支援の視点のみから見た場合は、ついたての裏は見えず、個人化プロセスに戻ってきたときだけ、その成長を「自己の充実」（人格の完成）の側面から見るができます。左の社会化支援の視点のみから見た場合は、逆に、個人の自己への関心と自己受容のレベルアップの様子を見ることはできず、共存から共有への社会形成者としてのレベルアップの側面から見るができます。これらのいわば「断続的観察」が、図に示したようなスパイラルとしての理解により、「連続的観察」による「見える化」ができるようになると思います。

ここで私は、「個人化／社会化」の「見える化」による一体的理解を説明しました。青年期を過ぎ、成熟期、高齢期と進むに連れ、この「個人化・社会化」の振れ幅は小さくなる、あるいは統合に向かうのではないかと思います。し

かし、「個人として充実して過ごし、なおかつ社会人としても充実して過ごす」ことについては、生涯にわたる「人生の質」(Quality of life) のための課題であり、各世代に共通するものと考えて良いでしょう。

現代青少年の規範意識、倫理観などの欠落によって社会人としての基本的態度や判断力が未発達な状況を生み出していると一般には考えられています。私は青少年の社会化の最終到達像の概要を下図のように設定しています。

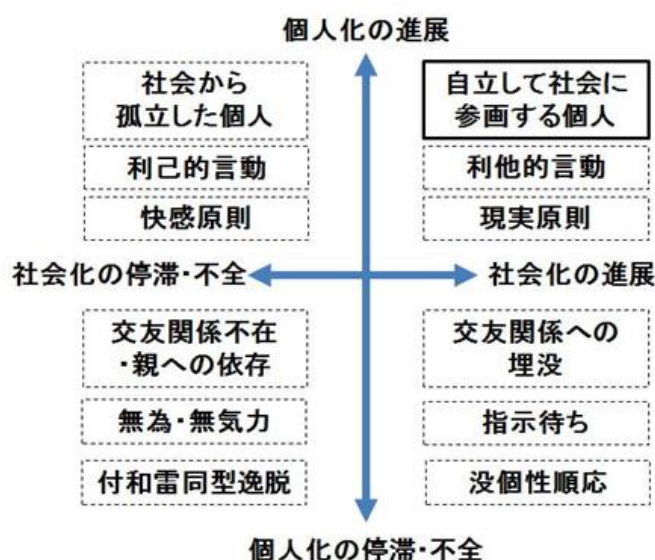


図 青少年の社会化の進展と不全

社会化を個人化と対比させて、上図のような 4 類型を想定しました。横軸に社会化、縦軸に個人化の水準を設定しています。ここでは、Ⅰ 社会化・個人化タイプ、Ⅱ 個人化・非社会化タイプ、Ⅲ 非個人化・非社会化タイプ、Ⅳ 社会化・非個人化タイプとして表しました。たとえば、「青少年が重大事件を引き起こしたり、新たな青少年問題が浮上したりするたびに、社会の側は、彼らに望ましい社会化の達成を求めようとしてきた」ということだけに注目すると、その対応は、図のⅣ 社会化・非個人化タイプに導くものと解釈できます。これに対して、4 タイプが「見える化」していれば、各タイプの特徴に適合した内容と方法でⅠ 社会化・個人化タイプに導こうとすることが適切と考えられるでしょう。

8 市民との協働のために

勉強は個人で若い時から続けるものであるから、行政が講座を毎年予算化して支出するのは適当ではないと思います。もっと市民ひとり一人の勉強の必要性和自主性を引き出すには、行政は学習の環境整備に力を入れるだけでよいと思います。(隣保館)

回答：重要な指摘だと思います。しかし、じつは「学習機会の提供」も行政による「環境醸成」の一環として行われていると考えられます。ですから、講座も含めて、行政が役割発揮すべきなのにしていないという「不足」についてこそ、われわれが考えなければならない課題だと言えるでしょう。そのポイントになるのは、「楽習と参画のまち」をめざした「市民との協働」のための「仕掛け」です。

2017年佐野市生涯学習アンケートの結果を因子分析したところ、下図のような結果を得ました（[第2次佐野市生涯学習推進基本構想・前期基本計画](#)）。

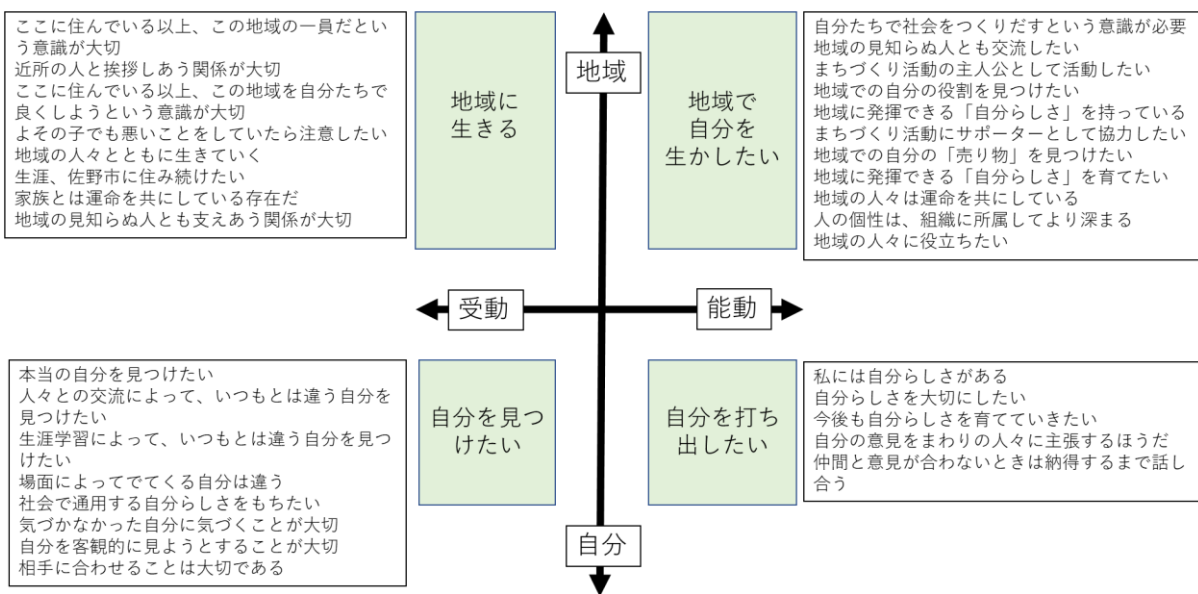


図 佐野市民の生涯学習関連の志向

これまでの生涯学習推進施策においては、生涯学習の自主性の尊重の原則を十分認識しつつも、実際には「足りないところに足りないものを注入する」といった単純な考え方が支配的でした。しかし、これでは自己決定力は育ちませ

ん。自己決定力が、どのようにして獲得され、「楽習と参画」のまちづくりにおいてどのようにして発揮されるのか。この、まだ誰も答を知らない「未知の問い」へのアプローチの一つの方法として、このような 4 タイプの「見える化」をもとに、各タイプに応じた推進施策を開発する必要があります。このことについて、同構想では次のように述べています。

たとえば、地域×能動の「地域で自分を生かしたい」に対しては「まちづくり活動メニューの提供」、自分×能動の「自分を打ち出したい」に対しては、「自己診断カルテの作成」、地域×受動の「地域に生きる」に対しては、地域を知る機会や多世代交流の場の提供、自分×受動の「自分を見つきたい」に対しては、居場所・出会いの場の提供などが考えられます。

このような個人の状況やニーズに合わせて多様な選択肢を用意することか、「私の楽習」からの出発を保障することにつながるのです。

「自立して社会に参画する個人」を到達像とするとき、このような「生涯学習関連の志向」のタイプを「見える化」し、これを尊重して進める必要があると考えます。

最後に、市民との協働のための中央官庁の最近の動向として、「公民館への注目」が高まっていることを紹介したいと思います（[西村美東士書評](#) 牧野篤編『社会教育新論－「学び」を再定位する』ミネルヴァ書房、¥3,080、2022年4月12日）。

牧野は次のように述べている。

厚生労働省は、増え続ける認知症高齢者の存在を前提にして、地域包括ケアから地域共生社会づくりへと政策を展開させ、その政策の基本的な枠組みを地域コミュニティへの「福祉からのアプローチ」と「まちづくりからのアプローチ」とにこの両者を媒介するものとして「出会いと、学びのプラットフォーム」を形成するとしている。この施策は、「出会いと学び」を住民の中に組織し、住民自らが地域社会をつくり、担うことで、共生社会を福祉とまちづくりの双方から構成しようとするものであり、その実践的基盤は社会教育と重なり、かつ公民館を拠点とした住民によるまちづくりの実践をとおした、福祉機能の形成と向上なのである。この事例に見られるように、社会教育ではない社会教育として、それはすでに社会教育の実態を構成しているのである。

牧野は「一般行政のプラットフォームとしての社会教育」として、次のように述べている。このような事態に直面して、改めて住民自治が育ち、団体自治が支えられ、それが改めて住民自治を鍛えつつ、社会の永続性を運動として生み出す

ことのあり方が問われている。たとえば、公民館の設置を奨励した文部次官通牒（寺中構想）には、次のように記されている、「国民の教養を高めて、道徳的知識的並に政治的の水準を引上げ、または町村自治体に民主主義の実際的訓練を与へると共に科学思想を普及し平和産業を振興する基を築くことは、新日本建設の為に最も重要な課題と考へられる……。この課題に応えるために「町村公民館の設置を奨励することとなった……」、「本件については内務省・大蔵省、商工省、農林省及厚生省に於て了解済である……」。

公民館設置の奨励においては、文部省が主導するが、町村の民衆生活のあらゆる側面に対応する中央官庁、つまり当時の官制で内務省、大蔵省、商工省、農林省、厚生省が既に了解しており、その了解のもとで文部次官通牒として通達することとなったというのである。

住民生活の様々な側面に対応した行政領域が地域社会で総合化された、中核的な機関として公民館が構想されていたことがわかる。それを敷衍すれば、社会教育はいわゆる一般行政のプラットフォームとして、また一般行政の中に浸透しているべき理念としてとらえ返すことができるのではないか。

肝心の文科省が、各省庁のこのような「公民館への注目」の動向にやや疎い点が気になりますが、行政担当者にとっては、市民との協働の基盤として、「人々の暮しや仕事に応え、学び合いと支え合いを進める公民館」の存在に注目することは、不可欠と言えるでしょう。